



TOEFL Mail Magazine

Vol. 68



June 2008

[ホーム](#) > [TOEFL®メールマガジン](#) > [第68号](#) > [For Lifelong English](#)

INDEX

- [今号目次](#)
- [達セミに学べ](#)
- [SELHi校の試行錯誤](#)
- [HASSHIN! 耳より情報](#)
- [TOEFL iBT体験レポート](#)
- [上](#)
- **For Lifelong English**

オフィシャルサイトへ

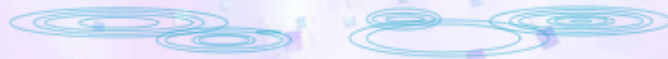
- [TOEFLテストトップページ](#)
- [TOEFLテスト教材ショップ](#)
- [TOEFL ITP テスト](#)
- [Criterion](#)

WEBマガジンへ

WEB MAGAZINE

英語で実践!
世界約30か国で
海外短期ボランティア

For Lifelong English



いいね! 0 シェアする

様々な世代の人々が様々な場で、生涯を通して何らかの形で英語にかかわって仕事をしています。

英語は人それぞれ、その場その場で違います。このシリーズでは、英語を使って活躍する方にお話を聞き、その人の生活にどう英語が根付いているかを皆さんにご紹介し、英語の魅力、生涯にわたる楽しさをお伝えしていきます。

英語はこんなに楽しいもの、英語は一生つきあえるもの。ぜひ英語を好きになってください。

[\[For Lifelong English|生涯学習としての英語\]バックナンバーはこちら>>](#)

第11回

イギリスの学会で論文発表した大学生は日本でごく普通の高校生だった？

英語クラスで一番下から出発し、学会での論文発表にいたるまでの成長とは
その1



鈴木 佑治

立命館大学生命科学部生命情報学科教授
慶応義塾大学名誉教授



山中 司 (やまなか つかさ)



立命館大学言語教育センター嘱託講師

日本の英語教育には、とかく典型的な批判がついて回ります。いわく「聞けない、話せない」。しかし本当にそうなのでしょうか。高校までの英語教育でも、大学での英語学習においても、コミュニケーションについて本当に大事なことを、実は私たちは学んでいる、もしくは学ぶことができるのではないのでしょうか。今回は、立命館大学で嘱託講師をつとめている山中司君にインタビューしました。山中君は、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で私の英語と言語コミュニケーション関係の学部・大学院の授業を履修しました。出身は岐阜県で、公立中学校と高等学校で英語を学び、SFCに入学しましたが、英語のクラス分けで一番下のクラスで勉強することになりました。その山中君が、4年後、イギリスのケンブリッジ大学の教育学会で論文を発表し、世界的に著名な大学の研究者と意見を交換するまでに上達したのです。彼がどのようにしてそこまでの英語コミュニケーション能力を身につけたのかインタビューしてみたいと思います。

◆ 「聞く・話す」ができないごく普通の英語力からの出発

- 鈴木：** 今回山中君を紹介しようと思ったのは、彼がまさに発信型英語教育を体験し、ある意味成功した生きたサンプルだからです。さて、山中君は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）の難しい入学試験を通ったのですから、英語の読解や文法は相当出来たと思いますが、1年生の時に実施された英語のクラス分けのためのTOEFL ITPでの出来はどうでしたか。
- 山中：** 読解のセクションや単語などはよくわかったのですが、ヒアリングはこんなに速くしゃべるのかと思うくらい、何を言っているのか全くわかりませんでした。私自身はそれなりに英語はできると思って大学に入って来たのですが、TOEFLの点数はそれほど高くありませんでした。特にヒアリングは、洋楽が好きなのでもなく、外国人の友達がいたわけでもありませんから、苦手でした。岐阜の高山に行けば外国人の観光客もいたのかもしれないですが、特にそういう接点もなく、勿論外国に行ったこともなく、話したり聞いたりする機会はまったくありませんでした。そういう場面になったら、逃げるような人達の1人だったと思います。
- 鈴木：** SFCは帰国子女が多くて、岐阜から来ていきなり英語が飛び交っているキャンパスに接してどう思いましたか。
- 山中：** 皆、日常的に英語で授業のことを話したり、例えば生協で買い物していると英語が聞こえてくるのです。私は田舎から出て来たばかりで、はじめは脅威を感じたというか、ショックを受けました。そしてTOEFLの点数に応じたクラス分けで、私は一番英語力の劣る学生たちのクラスに指定されました。それが鈴木先生のクラスでした。

鈴 そう、君は読解や文法は出来ました。けれどヒアリングなどの
木： 実用的な英語力がなく、あまり得意ではなかったですね。それでも、読解や英文法、語彙力に関しては、全英語受講者の中ではトップクラスであったと思います。1年の秋学期から英語の授業が始まりましたが、そのクラス全員に共通していたのは、どこかで英語に対する自信を失ってしまったということであったと思います。

山中： そのクラスでプロジェクトをやろうということになりました。私は、受験で一生懸命勉強してきた英語がたいしたことないと感じて、少々傷ついていたのですが、何かしなければいけないと、鈴木先生に相談をしに行きました。そのとき、プロジェクトのほかに、中・高生に英語を教えるアルバイトの話があって、英語で下位クラスの私がやってもいいのか悩んでいる、ということも相談しました。すると鈴木先生は、「どんどんやればいい、やるうちに自分も成長できるはずだ」とおっしゃってくれました。

鈴
木： 私はそんないい事を言ったんだ。（笑）

山中： はい。さらに「今あるものを使えばいい」と。

鈴
木： 「今あるもの」とは？

山中： 文法力、単語力などです。今振り返っても、受験勉強で得たものは相当なものでした。そしてその時からアルバイトを始めました。すると教えることはとても楽しかったし、難しくもあったのですが、その中で自分が成長していくことができ、さらに英語教育ということに興味を持ち始めたんです。

鈴
木： そこで、プロジェクトのテーマは—

山中： 「教育」にしました。当時、学力低下とか、分数の出来ない大学生とか、「ゆとり教育」が揺さぶりを掛けられ始めた時期だったので、最初は週刊誌的に興味を持ったということだけかもしれませんが、「教育」でやろうと思いました。

◆ 今あるものを使う

鈴 聞いたり話したりといった、実用的な英語がままならない人達
木： の中で、君は教育プロジェクトをやると。

山中： はい。そこで、まず自分が教えている塾でアンケートをとらせてもらうことにしました。英語のリサーチは、研究の方法論に基づいて、自分なりの仮説を立ててその実証のためのデータをとることでした。そのとき、決して英語を話せるわけではなかったのですが、「今あるものを使う」ということを実践しました。読解が出来て、単語を知っていて、表現を知っている。その持っている力を使って、そこから自分はやっていけばいいのだと。そうした時に、これまで学んできたものが大きく生きて

きました。例えば受験英語に関していろいろな批判はありますが、私は本当に無駄ではなかった、と思っています。

鈴 そのとおりですね。人生において無駄なものなんて何ひとつないですよ。すべてリサイクルできる、もう一回リノベーションできる。何かやっていると、必ずそれが生きてくる。やっぱり一生懸命やったんだから活かさなければ損です。それを山中君は活かしたわけですね。

山中: はい。これは自分でも快感だったのですが、今あるものを、出し惜しみすることなく思う存分使いました。初めは覚束ないところもありましたけれども、実は自分は材料を持っていたのだと気づくことができました。プロジェクトの授業というのは、毎回発表があり、自分のテーマがあるので、進めないといけないういし、進めたい。普通の日本人にとって英語での発表は、日本語で発表するのとはまったく違うので、毎回、その発表の前には最初から最後まで全部原稿を書いて、準備をしました。

鈴 日本語をまず書いてから英語に訳すのでは、間に合わなくなってくるでしょう。すると初めから下手でもいいから英語でやってみようということになったのでは？

山中: そうです。そのプロジェクトの発表では、私も拙い英語で発表しますが、聞いている側も立派な英語で発言するわけではありません。両方とも英語は拙いのですが、辛らつなコメントをしてくれたり、リサーチのしっかりしていない部分を指摘してくれたりするのです。そして面白いことに、内容が深くなるにつれて、英語力があとから付いて来たということをもよく覚えていています。

鈴 まず興味のあるコンテンツがあって、そこに英語で食いつく。

木: そういう授業を1年の後期に始め、2年の前期まで続けたのですね。すなわち、2学期とったわけですね。

◆ 興味が英語力を引き上げる

山 2学期目からはシンポジウム形式になって、4人のグループで取り組みました。

鈴 他にはどんな人がいましたか。

山中: 1人は数学に関する英語プロジェクトを、もう1人はコンピュータが得意で情報処理教育に関するのを、最後の1人は教育で哲学を考えるとということをやっていた人です。みんなやることは全く違うのですが、「教育」という切り口では繋がって来ました。

鈴 「教育」という共通点ですね。2学期目は、1学期にやったプロジェクトをベースに、「教育」という切り口で、英語で議論し、発表し、書いて提出、というシンポジウムをやります。2年になるとコンテンツの専門分野を英語とする授業になります。それは普通の大学では教養課程の英語に属するものですが、SFCで

は、プロジェクトとワークショップに分けて、2つを連動させています。このワークショップにはとても素晴らしい先生方がいらっしゃるから、英語力がどんどんついたのではないのでしょうか。

山中: はい。私がお世話になった先生の中に倉住修先生（現白百合女子大学 文学部 英語英文学科 准教授）がいらっしゃいました。当時SFCでは非常勤で来られていたと伺いました。先生は、リサーチの方法論の中でも特にリーディング、アーティクルの部分から、いかに情報を取ってくるかということを徹底的に教えてくださいました。

鈴木: リーディング・ワークショップですね。倉住先生はプロジェクトに使える英語能力をつけることを強く意識して、学生さんに必要な、リサーチに役に立つような、要点をつかむ読解のコツを教えてくださいました。プロジェクトと同時に取ったから、相互作用が出てきますね。

山中: はい。もう一つのワークショップでは、ディベートの仕方を教えてくれたロバート・由井先生にも大変お世話になりました。由井先生も内容を重視されていたので、英語が下手だということは関係ありませんでした。ディベートであれば、英語でも何とか主張して打ち負かしたいと思いますし、勝つためには調べますし、一生懸命決め台詞を準備したりします。毎週大変でしたが、いい経験になりました。また、ネイティブのエイブラハム先生からは英語の表現を教わりました。エイブラハム先生はどんな英語でもいいからなるべく長くしゃべってみようということをされていて、私たちにも自信ができました。

鈴木: 私のクラスだけでなく、そのような他のいろいろな授業があって、テクノロジーや研究の方法論を学び、それらが活かされたんですね。

山中: そうです。今となっては普通ですけども、SFCでは、いかに効果的にリサーチして発表するかということについて、視覚的に訴えかけるものや証明するためのデータといったものを整えるということも学びました。

鈴木: これらの授業の先生は、学生主体の授業を行い、細かいことで流れを止めずにどんどんやりなさいと積極的に後押しをするような、ファシリテーターという役割も演じていただきました。

山中: 毎回課題をもらうだけのやり方だったら、30分なり1時間勉強しておけばいいのですが、SFCのやり方は、自分たちの興味のあることなので、天井がないわけですから、どんなレベルにでも出来たのです。

鈴木: どれも受身型ではない本格的なプロジェクト1つと、3つのワークショップを連動して4つも取ったら、大変だったけれど力になったでしょう。山中君を含め、1年の初めでは人の前に立って英語を喋るなんてとんでもないと思っていた人たちが、2学期終わった段階でどうでしたか。

山中: 15分ぐらいプレゼンテーションをして、それについてディスカッションしてごらんと言われたら、あまり時間をかけずに、皆平気で出来るようになっていました。

鈴木の一口コメント

山中君は現在、私と一緒に立命館大学生命科学部・薬学部でプロジェクト発信型英語教育を実現すべく、教鞭をとっています。実際に自分が体験したことを活かしながら、学生さんに楽しく、しかもしっかりとプロジェクトをしてもらう環境を整えています。この4月から始まったばかりですが、すでに学生さんたちはとても素晴らしいプロジェクトを立ち上げています。彼らが生命科学・薬学での研究をプロジェクトとして立ち上げ、英語で発表できるよう、他の2名の同僚と相談しながら励んでくれています。

どんな趣味・興味であろうと、良いものであれば徹底的に追及すると必ず専門分野との関連が出てくるはずです。山中君の場合は趣味・興味が教育であったので、今、そのまま自分の専門分野につながり、上記の職を得ているわけです。その端は英語のプロジェクトでした。

山中さん登場の以前のメルマガ：「e-Language in Action」

[第55号](#) [第47号](#) [第43号](#) [第37号](#) [第36号](#)

[バックナンバーを読む](#)

[トップへ戻る](#)

上記は掲載時の情報です。予めご了承ください。最新情報は関連のウェブページよりご確認ください。

© CIEE, 2008 All Rights Reserved.